令和４年度　東京都立大泉高等学校附属中学校経営報告

１　今年度の取組目標と方策

（１）　教育活動の取組目標と方策

①　知的探究活動

ア　高等学校における知的探究活動「探究と創造（ＱＣ）」への確実な接続を目指して、中学校段階で探究活動の基礎的なプロセス、必要な知識・ノウハウを体系的に習得させる。

イ　探究活動の中にデータサイエンスや統計処理を取り入れる。

ウ　個人タブレットやネットワーク（Ｔｅａｍｓ）を活用する。

本格的な中学探究への着手のために、知的探究部に中学担当を配置した。「課題発掘セミナー」を軸として積極的に外部機関と連携し、様々な分野の専門家を招き、ワークショップ、講演会を月に１回以上実施した。授業においても教科横断的な探究活動を心がけ、探究力の基礎となる諸能力を養う計画を立てた。成果発表会においては、学年を越えた交流形式を工夫して行った。コロナ禍の影響を受けつつもほぼ計画通り実施することができた。その結果、生徒の論理的思考力や表現力、判断力を養うことができた。特に１月下旬に行った「ＯＩＺＵＭＩ　ＡＷＡＲＤ」では、中学Ⅰ年から高校２学年の５学年合同による発表会を、初めて実現することができた。探究的な学校行事については全般的に昨年度よりさらに手応えが得られた。データサイエンスや統計処理については、外部講師による講演や夏季特別講習において実施した。初歩的な内容であっても中学段階からこのような分野に振れさせる意義は大きい。タブレットの活用も順調に行われている。

②　進路指導

ア　総合的な学習の時間における探究活動とキャリア教育により、自己についての理解を深めるとともに「１０年後の自分」をイメージし、その実現を図るために生徒の発達段階に応じた目標を設定させ、高等学校へとつなげる。

イ　生徒の発達段階に応じて自己の能力や適性を把握させるとともに、探究活動を通じて大学や研究所と連携を図りながら主体的に進路を選択する能力を育成し、生徒の希望する進路の実現を図る。

進路キャリア部と学年が協力して、生徒の発達段階に応じた６年間を見通したキャリア教育の実践を目指した。生徒に対してはホームルームや総合的な学習の時間等においても自己の進路に対する意識づけを行ってきた。保護者へも保護者会や個別面談を通じて進路情報を提供した。今年度から中学生向けの進路通信を発行した。毎年恒例の中学Ⅲ年生向け進路講話も実施した。いずみ会の人選により、本校の卒業生が大変有益なお話をして下さっている。中学Ⅱ年生は今年度職場体験を実施することができた。受験を終えた高校生合格体験スピーチを中学生にも視聴させ、受験への心構えを中学施段階から養っていく。

③　学習指導

ア　英語、数学において少人数指導を実施することにより基礎的・基本的な内容を確実に定着させるとともに、発展的な学習も積極的に取り入れることによりより一層の学力の向上を図る。

イ　ティーチャー・イン・レディネス（ＴＩＲ）など放課後の学習を充実させることで、生徒の個別の学習課題の解決を図るとともに、家庭における学習習慣の定着を図る。

ウ　課題発掘セミナーを通して知的好奇心を喚起させ、自発的な学習を促す。

エ　朝読書や読書月間の推進を通して、豊かな情操を培うとともに落ち着いた学習習慣の確立を

図る。

オ　生徒一人ひとりの学習状況を把握して、生徒・保護者との三者面談を通して協力体制を構築し、生徒の学力の定着と伸長を図る。

カ　総合的な学習の時間において自ら課題を設定し、調査・研究・発表及び体験的な学習活動を通して言語活動を充実させ、自ら学ぶ意欲を高めるとともに、論理的な思考力や判断力、プレゼンテーション能力の育成を図る。

キ　全教科でＧＩＧＡ端末を活用したアクティブラーニング・探究学習を推進する。

ク　全教科において、教師が「問い」を発することを意識し、探究活動を推進する。

年度当初は新型コロナへの対応に配慮が必要であったが、２学期にはほぼ通常に近い状態で授業を行うことができるようになった。探究学習については、全教科で意識的に行うとともに、授業観察シートを改良し、管理職が授業のポイントを確認して担当者にフィードバックすることで、さらなる定着を実現することができた。英語・数学において少人数指導を実施し、きめ細かい指導を行って基礎的な内容を定着させるとともに、レベルの高い授業も積極的に取り入れ、生徒の学力向上に努めた。ＴＩＲなど放課後の学習も、今年度は実施することができた。また、全学年で三者面談を夏季休業期間に実施、また個別に二者・三者面談を適宜実施した。探究活動や授業において、ＧＩＧＡ端末を有効に活用した。

④　生活指導

ア　月１回の朝礼や道徳の授業を通して、規範意識や生活規律を向上させる。

イ　生徒相互や生徒と教員間の「挨拶」を励行するとともに、学校生活のすべてにおいて「時間を守る」態度を身に付けさせ、社会生活の基礎と互いに尊重する心を養う。

ウ　スクールカウンセラー、養護教諭、担任の連携を強化し、いじめの早期発見を図るとともに、事案発生時は学校いじめ対策委員会を中心にいじめ防止と対策について検討する。

月１回の全校朝会は今年度も放送及びオンラインでの開催となった。全学年の生徒と教員が同じ目線で情報やルールを共有することができた。今年度は道徳の特別授業を実施した。

「挨拶の励行」については、生徒会からの呼びかけがなされるとともに、各学年でも毎年の恒例になっている「挨拶運動」を行った。スクールカウンセラー・養護教諭・担任との連携を強化しいじめに発展する前段階での対応に努めることができた。いじめの発生件数は「０」であった。

⑤　特別活動・部活動

ア　学校行事や委員会活動、部活動など、高等学校との連携を通して、豊かな人間性とリーダーとして活躍できる資質を育成する。

イ　生徒会活動を通して、本校の一員としての自覚と責任感を深めさせる。

ウ　３年間毎年実施する宿泊を伴う行事を通して、望ましい人間関係を育てるとともに、リーダーシップやコミュニケーション能力の育成を図る。

学校行事や部活動は今年度もコロナ禍の影響を受けたが、縦割りの体育祭、全校挙げての文化祭を行うことができた。合唱祭も外部ホールを借りて本格的に実施した。生徒の主体的な行事運営により、リーダーシップを発揮する生徒達の姿が多く見受けられた。行事、特別活動を通じて高校生から学ぶ場面は幾度もあり、中学生は大いに刺激を受けていたようである。

中学は３学年とも宿泊行事を実施することができた。いずれの学年も都教委の宿泊行事ガイドラインにより、行事前後のＰＣ検査実施、班別行動はなしという制限を受けたが、生徒が初めて宿泊行事を経験できたことは、教育活動において大きな意義があった。また様々な機会における他校とのオンライン交流も一つの手法として定着してきた感がある。中高一貫連携事業では生徒会交流、各種大会に出場し、複数表彰された。作文やエッセイ等の作品応募においても賞をとる生徒が多く出た。

⑥　国際理解教育・国際交流の推進

ア　ＪＥＴ・ＡＬＴとの交流やⅢ学年における「国際理解」、希望者による海外語学研修、Ⅱ学年における姉妹校生徒の短期留学受け入れ等の取組を通して、国際社会への興味・関心を高める。

イ　国際交流コンシェルジュと連携を取りながら留学生や学校訪問の受け入れを行う。

Ⅰ学年においてはＡＬＴを積極的に活用して国際社会への興味・関心を高めさせるとともに、英語の活用能力を育成し、ブリティッシュヒルズ英語研修を実施した。Ⅱ学年においても英語活用能力をさらに高め、同じくブリティッシュヒルズ英語研修を実践した。Ⅲ学年においてはオンライン英会話の授業を導入し、年間を通して国際理解教育・国際交流の推進に努めた。今年度はニュージーランドの姉妹校の生徒と、オンラインチャットやメッセージのやり取り等を実施することができた。年度末にニュージーランド海外語学研修を実施する予定であったが、コロナ禍の影響で断念せざるを得なかった。代替として来年度の夏に実施する計画を進めている。

⑦　健康づくり

ア　校内美化を推進し、健康的で安全な学習環境づくりに努める。

イ　防災ノートや安全教育プログラム等を活用して、危険を予測し、回避する能力や他者や地域の安全に貢献できる資質・能力を育成する。

ウ　養護教諭やスクールカウンセラーとの連携を通して全校的な教育相談体制を充実させ、心の病の早期発見を図る。

生活指導部を中心に校内の美化を推進するとともに、全教員が当初目標に美化指導を掲げ、学年で美化意識を強化することができた。防災教育については、学年集会やホームルーム等を活用して、生徒への防災意識を高めさせることができた。

スクールカウンセラーによるⅠ学年の全員面談を４月の健康診断時において早めに実施し、学校のカウンセラーによる支援を生徒全員に意識させることができた。思春期の子供の心理をテーマにした保護者向け講習会も、年に数回実施している。保護者や生徒の相談件数が多くなっているが、重要案件については、管理職、担任との連携により情報共有を確実に実施している。

⑧　食育の推進

ア　保健体育や技術・家庭科等の授業や給食指導を通して食育の推進を図る。

コロナ禍の影響を受け、相変わらず食堂での一斉喫食ができず、教室での喫食する学年もある。栄養教諭による専門的な給食指導によって、食に対する教育が年間を通して行われた。今年度はＳＤＧ‘ｓを意識した取り組みを行った結果、廃棄率が激減するという効果が出た。アレルギーのある生徒に対しても、組織的な対応を行う体制が整っている。

また、家庭科の授業を通して食育の推進に努めるとともに、日本文化プログラムを活用して和食の第一人者による実践講義を実施することができた。

⑨　学校２０２０レガシーの推進・体力向上

ア　文化プログラム・学校連携事業実施校として、「日本の食文化」に対する理解を深める取組を推進する。

イ　体育授業、部活動、体育的行事を通して、日常的な運動習慣を身につけさせ、体力の向上を図る。

総合的な学習の時間、道徳や体育の授業等を通してアスリートに関する学習を実践するとともに、２０２０レガシー教育を推進した。多様性を尊重し、ボランティアマインドをもった生徒の自主活動を支援し、継承していく。

⑩　特別な支援が必要な生徒への適切な支援体制

ア　障害者差別解消法に基づく合理的配慮を適切に実施する。

イ　必要に応じて「特別支援教室よる指導」制度を活用する。

⑪　自殺対策に資する教育の推進

ア　東京都教育委員会作成資料「SOS の出し方に関する教育を推進していくための指導資料」を参考に生徒理解を深め、未然防止に努める。

「ＳＯＳの出し方に関する教育を推進していくための指導資料」DVD を参考に、自殺予防に努めた。発言や行動の変化や体調の変化など、周囲の人の変化に敏感になり、心の悩みや様々な問題を抱えている人が発する周りへのサインに気づいたり、自身が悩みを抱えている場合には教員や保護者に相談したりするよう、適切な機会を設けて呼びかけている。

その結果、担任、養護教諭やスクールカウンセラーへの相談につながっている。

⑫　８０周年記念式典準備委員会の設立

ア　１０月実施に向けて準備を進める。

都教委の通知により式典の実施に関して制限がかかった。来賓は招待せず、練馬文化センターでの実施を断念せざるを得ないこととなった。「都立大泉高等学校創立８０周年記念事業・都立大泉高等学校附属中学校開校１０周年記念事業」は名称を「祝う会」とし、校内の視聴覚ホールでの実施に変更した。規模は縮小したが、池上彰氏の講演、ＰＴＡ及びいずみ会の参加はお願いした。視聴覚ホールに入れない学年は、教室でのオンライン視聴となった。しかしながら文芸部書道班による壇上の題字、日本文化部華道班による壇上生花、合唱部による校歌斉唱と、生徒が携わって会を作り上げるかたちになったのは喜ばしいことであった。記念誌を発行し、記念品を用意した。

⑬　校内環境の整備

ア　施設の安全管理を徹底する。

イ　自習室や教室でのコートの保管場所等を改善し、学習環境の整備を推進する。

毎日管理職による見回りを徹底することで、施設の安全管理を行うことができた。とくに台風や大雨時の施設管理を徹底し、速やかな異状発見に努めることができた。また、年次進行で完全中高一貫化に伴う教室配置変更、ロッカー配置変更、下駄箱の配置変更等を行った。

⑭　ライフ・ワーク・バランスの推進

ア　「学校における働き方改革推進プラン」に基づき学校の業務改善を推進する。

イ　テレワークの導入と計画的な仕事の進め方により業務の効率化を徹底し、教職員一人ひとりのライフ・ワーク・バランスの実現を図る。

ウ　日々挨拶とコミュニケーションを積極的にとることにより、明るい職場風土づくりを推進する。

エ　管理職は、毎月、長時間労働者への超過時間の通知と産業医面接の実施により、教職員の組織管理や時間管理、健康安全管理を行う。

積極的にコミュニケーションを取ることによって、明るい職場作りを推進し、教職員が気軽に相談しやすく、また休暇を取りやすい雰囲気を作るように努めた。また、産業医面談を積極的に行い、勤務時間が超過してしまう教職員の勤務状況や健康状況を把握するとともに、休暇の取得を勧めた。

⑮　経営企画室と一体となった学校経営の推進

ア　経営企画室と教員組織が円滑に連携を図り、施設管理は予算執行管理を適正に行う。

イ　施設・設備の点検と維持管理を強化し、安全管理と事故防止に努める。

ウ　経営企画室は都民サービスの視点に立った窓口業務、広報活動を推進する。

年間を通して、施設管理と予算執行・補正を適切に行った。施設・設備点検を随時行い、破損個所などを発見した際、速やかに修繕等行い、事故防止に努めた。

⑯　その他

ア　年間を通した服務事故防止研修会を実施、個人情報の管理、服務管理、危機管理の徹底を図る。

年に数３回服務事故防止研修を行った。机上の整理や個人情報の適切な管理など、日頃から意識をするよう教職員全体に伝えることができた。しかしながら、クリーンデスクが不十分なケースもみられており、さらなる徹底が課題である。

（２）　重点目標と方策

新型コロナウイルス感染防止のための臨時休業に伴う、学習・行事・部活動等すべての教育活動の計画変更と円滑な実施を図る。

①　６年間を見通した系統的・組織的な探究活動の推進

ア　高等学校における知的探究活動「探究と創造（ＱＣ）」への確実な接続を目指して、中学校段階で新たな系統的なプログラムを実施する。自ら課題を設定するための原動力となる好奇心を高めるために、様々な活動を行うことで、探究活動の基礎的なプロセス、必要な知識・ノウハウを体系的に習得させる。新たに、データサイエンスや統計処理を学ぶことで探究活動の更なる発展を図る。

イ　各教科における授業・行事等を通して、主体的な学びを行わせる場面を設定する。

コロナ禍のなかで、対話的活動や校外活動が大きく制限されたが、各学年において、探究活動をすべての学習活動の柱として組織的に教育活動を展開することができた。特に中学段階からの探究活動の方向性が、中Ⅰ地域探究、中Ⅱ日本探究、中Ⅲ世界探究とテーマを設定することで明確化された。練馬区役所の協力により地域との連携を充実させることができた。あらたに外部の社会課題研究機関との連携も推進できた。中高一貫に根差した探究活動を行う準備が整った。「ＯＩＺＵＭＩ　ＡＷＡＲＤ」を実施することができた。

② ６年間を見通した系統的・組織的な進路指導

キャリア教育から進路指導へと６年間を見通した組織的な進学指導の実施を適切かつ確実に遂行することで第一希望の進路実現を支援する。

中高を見通した進路指導計画の策定という点ではいまだ未完成であるが、キャリアパスポートを活用し、生徒に学びのプロセスを振り返らせ、教員が対話的に進路指導する形を整え、職業観、勤労観を育成していった。高校卒業生の進学実績を経年比較すると、中学での学習習慣の構築と学力推移調査での成績が、高校卒業時の進学実績に大きく関わってくることが明らかになった。大学受験結果の分析を中学の学習活動にフィードバックし、また卒業生の６年間（もしくは３年間）の成績分析データを、担任による指導資料として中学の早い段階から活用していくことの重要性を学内で浸透させていく必要がある。

③ 学力のさらなる向上

アクティブラーニング、探究型学習などの指導力向上に向けて教科主任を中心として検討し、６年間を見通した教科指導計画と内容について教科の全教員の共通理解を図る。校外の研修や指導教諭の授業を参観することで「チーム大泉」としての組織的な教科指導力を向上し、生徒の学力向上を推進する。

コロナ禍の影響により対面的授業が制限された前半において、オンライン授業、オンデマンド、Ｔｅａｍｓを活用して創意工夫がなされた。教員も生徒もスムーズにＩＣＴ機器を活用するようになってきた。可能な限りアクティブラーニングを行い、新しい学力観に基づく能力の育成に取り組んだ。今年度からの完全中高一貫化に対応し、中高一貫校の特例を活かしたカリキュラムをさらに充実させ、検証していく。校内での相互授業参観も恒常化している。

④ 豊かな心と思いやりの心の育成

道徳や学校行事、部活動など教育活動全体を通じて、豊かな心と思いやりの心を育み、人間性を高める。

特別の教科「道徳」は、道徳推進教師を中心として、外部研修会での情報に基づく授業計画が準備され実施された。「道徳だより」により「生徒と授業者がともに意欲的に取り組むことができる授業」を校内で広めることができ、人権尊重の意識を醸成した。生徒に毎回作文を書かせることで、内省的な取組も目指している。

２ 数値目標

（１） 学習指導

生徒の授業満足度	９０％	９２．７％
講習満足度	９０％	８５．１％
定例教科会	１２回	１２回
教員相互授業見学	３回／年	１回以上／年

（２）生活指導

部活動地域大会以上出場	４部	０部
部活動入部率	１００％	８５．２％
行事満足度	７５％	９６．０％
校内美化	８０％	８８．５％

（３）キャリア教育

校内模試	３回／年	**３回／年**
生徒面談	２回／年	**２回／年**
三者面談	１回／年	**１回／年**
模試分析会	２回／各学年	**２回／各学年**

（４）入学選抜

入選倍率	６.５０倍以上	**４．６倍**

（５）広報活動

学校説明会等来校者	３，３００組	**１，８１６組**
塾・予備校説明会	１２回以上	**３回（オンライン含む）以上**
ホームページ更新	７００回以上	**１４７８回以上**

３　次年度以降の課題と対応等

（１）学校運営

・令和４年度から始まった高等学校の学級減、中学校の学級増に伴う教員定数の激減に備えた組織体制の構築が急務となる。各分掌、委員会業務の効率化を進めていく。

・学校評価アンケートの結果によると、学校生活についての生徒の満足度には、一定の評価があったと考えられる。新型コロナ感染症対策のための分散登校・オンライン授業等、例年と大きく異なった教育活動にもそろそろ収束の兆しが見え、次年度への期待感が表れてきた。

　学校行事に関してはできる限りの実施を試みた結果、体育祭は全校縦割りで実施することができた。文化祭では保護者の見学を可とした。合唱祭も外部会場にて本格的に行った。宿泊行事が全学年で実施した。海外語学研修はすべて中止となったが、海外の姉妹校とのメールの交換やオンラインチャットは継続的に実施している。来年度の海外語学研修に是非とも繋げていきたい。

・コロナ禍の中で大きな制限がかかった状況であっても、高等学校の「探究と創造（ＱＣ）」の基礎段階としての中学探究活動の位置づけを設定することができた。知的探究部と学年・教科がさらに連携して、課題発掘セミナーの充実とともに、教科への落とし込みを推進していく。生徒へ刺激を与え主体的活動を促すためにも、学年間の交流をこれからの目的としている。

・学習、探究、進路すべての活動にＧＩＧＡ端末が使用されるようになり、より高度なＩＣＴ教育が期待される。

（２）進路指導

・進路キャリア部が中心となり、中学段階から一貫した進路指導を目指した。学校評価アンケートによると進路情報の提供や進路指導に対して生徒の満足度は８７％と高いが、保護者の進路指導や情報提供における満足度は７０％程度であったことから、さらなる情報発信や積極的な展開が望まれる。今年度も昨年に引き続き、高校卒業生の進学実績において健闘が見られることを受け、より積極的に生徒のみならず保護者を意識して発信力を高めていくとともに、中学段階が高校卒業時に大きな影響を与えることを広く浸透させるべく、保護者会や講演会を充実させていく。

（３）学習指導

・次年度はコロナ禍の影響も治まり平常授業の実施が期待される。以前のように対話的アクティブラーニングの場面を増やしていけることであろう。生徒のより主体的な取組を導き出す

授業の工夫をしていきたい。この数年で得たオンライン授業、オンデマンド、Ｔｅａｍｓを活用した双方向型の振り返りの手法などを取り混ぜつつ、授業を充実させていくことが課題である。教員も生徒もスムーズにＩＣＴ機器を活用するようになってきた。中高一貫校の特例を活かしたカリキュラムをさらに充実させ検証していく。校内での相互授業参観も活発に行っていきたい。

（４）生活指導

・生徒の挨拶励行については一定の成果を得たと言えるが、未だ「教職員から挨拶がない」という声も聞こえる。教職員も自覚的に取り組んでいくべきである。また、校内美化については学校評価アンケートのポイントが上昇した。引き続き強化目標として設定する。

・中学において、年々不登校生徒が増えている傾向がみられる。外部機関と連携しながら生徒の指導にあたっている担任もいるので、ノウハウに関して学年を越えて共有できると良い。

・校則の見直しを実施し自主自立、規範意識の醸成に引き続き努めていく。制服については来年度より女子のスラックスを導入した。

（５）道徳指導

・道徳推進教師を中心に評価方法や授業計画を研究する中で、中学担任団の指導への理解を深めることができた。引き続き取り組みを行っていく。